
僕らが廊下を走る理由

清水涼太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らが廊下を走る理由

【Nコード】

N7403P

【作者名】

清水涼太

【あらすじ】

僕らが廊下を走る理由とは？

どこにでもある日常で起こった事件。

(前書き)

処女作です。

ある小説入門の本にテーマ「殺してやる」で原稿五枚書けというものが
があり書きました。

折角なんで投稿してみようかな・・・ってね(笑)

五枚しかないんで著休め程度に見ていってください。

ある年の2月。就職試験を終えた生徒らは、12年間の勉強から解放される間近だった。

「なあ、今日カラオケ行こうぜ！」

僕たちは授業前の放課、青春を謳歌するべく計画を練る。残り一ヶ月、どう暴れてやろうか。これまでに無いくらい浮かれていた。しかしそれを阻止する敵が動く。

この時期の先生はとても機嫌が悪かった。

「カラオケもいけど勉強しろよ。そんなんじゃ内定取り消しだぞ」生徒達はそれに対してもムカついた。腹が立った。殴りたくもなかった。

「うつせえ。簡単に取り消されてたまるか」

あと少しの我慢。一月も経ったら俺らは自由だ。面倒を起こしてはいけないと、強く握った拳をポケットに入れる。

「お前ら、精進してる佐藤を見習え。」

僕の隣の席の佐藤君。正義感が強くて、成績も優秀。その上教師の思惑に反して、頭の良さは友達の為にしか使わないような人だった。かっこいい奴だぜ。

バカな僕も、実際に助けてもらったことがある。

そして今日も佐藤君はクラスの誰かの為に働く。

「佐藤！課題3の答え教えて！」

「いいよ。えーっと、ここはね、減算回路だからV0＝(V2・V1)に代入すればいいんだよ」

佐藤君の説明には余分な言葉が一切無い。

求めている物だけを超簡潔に教えてくれるのだ。かっこいい奴だぜ。

「サンキュー佐藤。助かった！」

救済された生徒はお礼を告げる。

「さあ授業始めるぞ。席に着けよー」

先生が黒板に文字を書き始めると、それを合図にみんなが顔を伏せる。

黒板が白チヨークで敷き詰められたころ、突然聞き覚えのある低音が響いた。

携帯のバイブ。

睡眠人口が多いため、話声の無い教室では聞こえが良過ぎた。起きている生徒はその発信源を首を振って探す。

この学校では電源を切っていれば、持ってきてもいいということになっている。逆に電源を切らず授業中に見つかる犯罪。

不幸な事にそれは僕の鞆から鳴っていた。

先生は僕の席のそばに来る。

「おい、勝手に触んなよ！」

先生は無許可で鞆を開け、手探りで携帯を握り、それを全員に見せつける。公開処刑だった。

「これはお前のだな」

「すみません。電源消し忘れてて・・・」

僕は放課のテンションを殺し、誠意を見せる。

「社会じゃそんな言い訳通用しないぞ。最近お前ら弛んでるんじゃないか？就職が決まったからってダラダラとしてたら、社会に出てもクビ切られるだけだ」

在り来たりな説教をするだけして、判決を下す。

「これは卒業まで没収する」

「!？」その判断はあまりに異例だった。

今まで携帯が見つかった事例なんて山ほどある。なのになんで僕だけ？

ムカついた。腹が立った。殴りたくもなかった。

すると隣の救世主は手を上げて、弁護する。

「先生。確かに社会じゃ通用しないかもしれませんが、人間誰だってミスはあります。先生だって、一年生の時携帯鳴らしたじゃない

ですか。言っていることが正しいなら先生は既にクビです」

このクラスの意見を代弁するように言い放つ。

しかしそれはかなり勇気のいる行動で、自殺行為でもあった。

「消し忘れた俺が悪いんだ。止める佐藤！」

僕は手を広げて佐藤君の進行を塞ぐ様にする。

「こんなの黙ってられるかよ。いつもより厳しくする理由って、俺たち3年が社会に出るからだ。そうだろ？」

確かに先生らの最近の行いはやけにキツイ。

その訳が佐藤の言うとおりだとしたら、理不尽極まり無い。社会人として最低だ。

「佐藤。ちよつと来い」

そのまま佐藤君はどこかへ連れ去られた。

授業中、残りの15分がとても長く感じた。

「なあなあ、呼び出されたって事は反省文だよな。殴ったわけじゃねえし」

佐藤の前の席の奴が僕に話しかける。

「反省文も何も、悪いのは全部俺なんだ。佐藤君が罰を受ける理由すらねえだろ」

しばらくすると佐藤は帰ってきた。

「佐藤君、大丈夫か？」

僕は野次馬のように佐藤に尋ねる。

佐藤はとても暗い表情に。一体何があった？

「特別指導……。停学だつて……」

ム力ついた。腹が立った。殴りたくなった。

佐藤君は悪くない。悪くないんだ。

僕は学校に訴えるようにおもいつきり叫んだ。

「ぶつ殺してやる！！」

クラス全員が走った。ルールを破り、走った。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

出来れば感想をお聞かせください。

いい感想をいただければそれを糧にして頑張ります。

ダメだしの感想でもそれを糧に頑張ります。

時間に余裕があるなら両方お願いします!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7403p/>

僕らが廊下を走る理由

2010年12月30日20時15分発行